

## 「復興とは何か」を考える委員会について 議事録

■日時：2009年8月8日

■開催場所：関西学院大学 梅田キャンパス 1402号室

■会の名称：「復興とは何か」を考える委員会

■主催：関西学院大学災害復興制度研究所、日本災害復興学会

■参加者：中林一樹(首都大学東京)、室崎益輝(関西学院大学)、山中茂樹(関西学院大学復興制度研究所)、永松伸吾(人と防災未来センター)、渥美公秀(大阪大学)、矢守克也(京都大学)、山地久美子(関西学院大学)、宮原浩二郎(関西学院大学)、田中淳(東京大学)、魚住由紀(フリーアナウンサー)、安富信(読売新聞社)、青田良介(財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構学術交流本部大学連携事業課長)、中阪薫(関西学院大学復興制度研究所)、西村真一郎(朝日放送株式会社社友)、宮本匠(大阪大学大学院)

■報告者：矢守克也(京都大学防災研究所)

復興を語る上で大切だと思われるキーワードをいくつか紹介しながらの報告。

### ○「多様性」

復興を語る言葉のレパートリーは、必ずしもまだ豊かではない。何十年も使われてきた「ソフトかハードか」といった言葉が必ずしも悪いわけではないが、もっと豊かな言葉を提出することを試みたい。

### ○「生きられる時間」

ひとつのエピソードから。娘さんを地震で亡くされた方で、地震の体験をお嬢さんと同じ年ぐらいの子供たちに語っている方がいる。震災から9年の時に一冊の本を出した。なぜ9年目だったのか恥ずかしながら分からなかったが、すぐにわかった。彼女の娘さんは地震の当時小学校5年生、11歳だった。だから、この年には成人式を迎えることになる。娘さんのクラスメートはその年に成人式を迎えている。復興を語る時にひとりひとりの被災者、もう少しまとまった被災地に生きている時間にもう少しセンシティブじゃないといけないなと思った。

縦軸が何かという議論はよくしているが、もうひとつ横軸は本当に同じ時間が流れているのか。よく支援をし、よく被災者の人と一緒に生きていくためにも大切ではないか。復興を考えるには「時間」に基づいた実践が大切ではないか。

例)「牛時間」を持つ人や「豚時間」を持つ人が出会い、翻訳が起きていく過程の末に、抽象的な時間が生まれてくる。

## ○重建・恢复と復興・復旧

四川大地震の被災地における「重建・恢复」という言葉が何を意味しているのかが、日本の復旧・復興の考えるときに大切になるのではないか。海外の事例をみることで、自分(たちの社会)が「何でないか」を知ることができる。

2008年5月12日がどういうときであったのかをよく考えないと、阪神・淡路の教訓を伝えるということが頓珍漢になるのではないかと自省をしている。

北川(ホクセン)県庁の移転先の写真。もとの北川とは似ても似つかない地形的条件のところに新しい県庁ができる様子がわかる。

## ○「圧縮された災害復興」

「圧縮された近代化」(園田 2008)に触発されて考えた。四川では、地震直後の「あの頃～」も、仮設住宅も、将来に備えた防災教育も、X年後のバラ色の未来予想図も、すべて「今」に圧縮されている。時間軸にそって順番に起こるはずのことが、空間方向に拡散して同時にあれば「格差」につながる。しかし、これは、鄧小平の「先富論」を彷彿させるような「先建論」とでもいわれるのかもしれない。一時的には格差があっても全体を押し上げていく。1対99の論理。

では、「1964年に阪神・淡路大震災が起きていたとしたら」と思考実験をしてみると、きっと日本でも新幹線を前倒して建設していくような動きがあったのではないか。

この理屈(「先建論」とでも言うべき論理)にとって破壊的なのは、現時点における「格差」ではなく、現実的将来にとって「格差」が平準化するだろうという期待が消失すること。

北京大学からの研究者の一行に「恢复」には、「function、recovery、短期間…」という含みがあり、「重建」には、「hardware、re-building、長期間…」という含みがあると聞いた。重建という言葉には、「今までよりもよいものをつくるという意味がある」。この点に、重建に「世直し志向」があらわれている。この際、すでにあった計画を前倒し、拡充して、元あった計画よりよいものをつくるぞというニュアンスを感じる。また「重建は必ず新建だが、新建は必ずしも重建ならず」という重要フレーズも聞いた。

しかし他方で、重建にはふるさとを再創造するという意味がある。「重建家園」はスタンダードな中日辞典にも載っている。この場合の重建は必ずしもハードウェアだけではなく、一度さびれた「ふるさと」をハード的にも、経済的にも、人間的にも、活性化するという意味がありそうだ。

そうなると、重建には、「よりよいものを新しくつくる」とい意味と、「ふたたび盛んになる」という二つの意味が拮抗することになるようにも思われる。

「三つの代表」が典型的だが、中国では、政府がある既存のフレーズを使うと、そのフレーズがもともともっていた意味だけではなく、政府が使った、より特定の狭い意味でその用法を学ぶべきモデルとして(規範として)機能する点が重要だそう。重建の具体的

な用法をたくさん見せることで、既存の意味そのままではなく、「今までもよりよいものを新しくつくる」というニュアンスで使用すべき用語として使われ始めている可能性が高い。そしてこれが従うべきモデルである以上、よりよく従うことに対する報酬と、従わないことに対する社会的サンクションを伴うということである。

○「語り直す・語り継ぐ・語り結ぶ」ー語り(復興・人生)の「バイプレーヤー」ー

「語り口」の研究は、足利事件の供述調書を分析した研究にルーツを持っている。人の語り口はただの口癖ではなく、その人の暮らしの立て方を反映しており、それはすなわち生き方であり、復興の仕方である。誰をバイプレーヤーとして語るかが、その人の復興のあり方をきめているのであれば、そのバイプレーヤーに研究者自身になるのか、あるいは新しいバイプレーヤーとの出会いを演出できれば、その人が抱えている閉塞感などを払しょくすることができるのではないか。

Re-storying は、誰をバイプレーヤーにしようとしているのかによって決まる。語りの構図を変えることで、語り口が変わっていく。それが、人生そのものが変わっていくことにつながる。

○最後に紹介したい文献ー「噴火のこだま」清水展著ー

ピナツボ被災地の「新生」。アイデンティティのつくりなおしが社会規模に拡大すれば、それこそが、民族、伝統、文化への目覚め。アエタの文化がピナツボ噴火で危機に瀕したのではない、ピナツボ噴火がアエタの文化を意識せしめた。

<ディスカッション>

永松 「世直し」と「立て直し」について理解してきたところなので質問したい。単純に要約していえば、「世直し志向」は、人間や社会のあり方を根本的に変えようとする志向、「立て直し」は現状の延長として考える志向だと思うが、こうした言語を復興の現場に持ち込むことでどういう意味が出てくるのか。言葉を豊かにするということに着目するという理由は?

矢守 例えば永松さんが書いている「人間中心」の災害復興と、「社会基盤整備や経済活動の復活」を中心とする災害復興とを対照させているが、それでは世直し志向的な社会基盤整備も、立て直し志向的な社会基盤整備もあることを捉えきれないのではないか。

永松 世直しと立て直しは緊張関係にあるのか、共存関係なのか

矢守 もともとのオリエンテーションでは、緊張関係にあるが、実際の社会では両者のバ

ランスが大切。バランスの現状診断とカウンターバランスへ向けた介入が大切ではないか。

中林 酒田大火の復興、10年後の調査を要素ごとに調べて、営業者と非営業者に分けてみてみた。そこで、同じ座標の中に、収入がどう回復したか、近所つきあいがどう変わったかをプロットすると、とても多様なグラフが出てくる。しかし、個別的なものにいけば、「みんな個別に違うね」ということになり、「復興とは何か」という問いに答えられなくなるのではないか。

矢守 現在の復興の議論の中で、現在の日本社会を前提にして軸を精緻化するタイプの議論と、それらの全体のベースになっているようなものを理論化していくような議論の両方が必要なのではないか。

田中 確かに精緻化する作業の中で、矢守先生が求められている役割演技の一つは、「復興とは」、あるいは「よりよき」というものが議論されざるを得ない時に、個人の心の問題だけでは解決しないとき、社会や時代精神といったものとそうした個人をどうつなげるかが、まだ解明できていない部分ではないか。

宮原 復興学会での発表がとても新鮮だった。木村敏の時間、「まつりの前」と「まつりの後」という感覚は、誰でも理解できることだし、どちらもあるのではないかと思う。

分からないのは、今までの地域を発展させてよくしようということが即「世直し」型なのだろうか。統合失調症の時間感覚はとんでもない方向に行く。高度経済成長時代というのは、軸はしっかりしているのでは。GDPを二倍、三倍にしよう、というのは、ある種うつ病的でもある。

矢守 その通りだと思う。ただ、中国の、今の日本人のメンタリティからすると、成都や都江堰の新幹線の姿が革命的に映った。現在における中山間地域の課題をどのように克服するかと議論されていることを全く棚上げにして新しい議論をしようというのが本来「世直し」にあたるのだろう。

山地 韓国でも2001年に圧縮された近代化の議論がなされている。近代化と世直し立て直しの関係はどうか。

矢守 関東大震災当時の統治のあり方などを丁寧にみていくことから出来るのではないかと思う。

中林 圧縮をアナロジーとして発表されたと考えているが。

矢守 圧縮のどのステージで災害が起きているのかが、災害研究で大切ではないかと思う。

渥美 圧縮といってもコンテキストが違う。海外の事例から日本をみるというのはもちろん大切だとも思うが、今までの議論にないような近代化論を考えたいと思っている。

世直し/立て直しが永松さんの「人か物か」と直交するというのがよく分かった。中国政府がつかう言葉についての議論から、たとえば「心のケア」についてはどうか、考えたい。

中林 重建や社區といった言葉が中国と台湾では変わってくるだろう。台湾では自分たちが住むまちとしての社區だが、中国では政府から見た社區。

<今後の進め方について>

永松 別紙の通り、これまでの議論を整理してみたところ 13 の論点に整理できた。発言を生かすために、議事録から出来る限り忠実に発言を拾っている。討論中での発言は、前後の文脈が必ずしも明らかでないので、拾いにくい。このため、報告者の発言が中心になっている。

皆さんに議論頂きたいことは 3 点。

まず、このような整理を行うことに意味はあるかということ。個人的には、誰がどのような主張をどのような論点に対して提起しているかがわかり、議論の広がりや把握できそうなので意味があると思っているが、もし否定的な意見があるとなれば、ここで議論をしておきたい。

二点目は、整理することに意味があるとしても、整理の仕方に問題はないかという点。これは永松が議事録で主要な発言をマーカーで拾い、それを KJ 法で整理したもの。永松のバイアスがあるかもしれない。その点について、こうやればという意見があれば伺いたい。

三点目は、別紙はとりあえず論点に分けただけで、各論点の中での整理が十分に出来ているわけではない。より掘り下げるための議論も時間があればお願いしたい。

山崎 議論をする共通のモノサシが必要ではないか。

中林 とりあえず、永松さんが、13 個の箱をつくってくれたということ。この箱は今後も増えていくことだろうが、来年の 1 月 11 日には、その箱毎に議論を深める機会にするという案も考えられる。

宮原 役割的に申し上げるが、復興の定義を学会として固めるよりも、より議論を深める方向が大事。それから、「復興」と「災害復興」を切り分けて、後者の特殊性を踏まえつつ、

前者をより豊かにしていくことで、「復興」学が 21 世紀型の新たな知の可能性を持つのではないか。

永松 おっしゃるとおり。ここでの議論は「災害復興」に限定して行っているが、その特殊性は意識した方が良いと思う。

菅 「生活再建」など、「復興」の周辺概念の整理が必要ではないか。

永松 ワーキンググループの文献収集も終わったので、その作業の中でも意識していきたい。

矢守 整理はされているが、対立軸が明確になっていない。それぞれの主張が何に対するアンチテーゼなのかを明らかにしたい。

永松 第三者が勝手に対立構造をつくるのは難しい。発言者に対立を明確にして頂きたい。

田中 対立が明確になるほど、議論が尽くされていないという感じがする。